

盛況であったJaLSA「進学フェア」

◆新規加盟校も「参加して良かった」の声

全国日本語学校連合会（JaLSA）主催の第24回「進学フェア」が6月26日、東京都千代田区で北は北海道、南は沖縄まで全国津々浦々から参加したJaLSA加盟70校と、42校の大学・専門学校が一堂に会して開かれた。今回参加したのは、各日本語学校の進路担当教員の皆さんが中心で、各大学・専門学校の留学生担当の方と忌憚きたんのない意見交換を行った。

会場内42のブースは常に満席状態で、大学・専門学校の皆さんが休む暇もないほどの盛況で、双方ともに一コマ20分をフルに使い、制限時間を忘れたかのように真剣な表情で話し合っている姿が印象的であった。休み時間や空き時間にも、互いに興味を覚えた学校間でさまざまな話し合いが各所で続けられ、企画・進行に当たる事務局スタッフがマイクの音量を上げて時間厳守の案内を再三しなければならないほどの熱気に包まれていた。

各ブースでは、大学や専門学校の特長などがパンフレットを片手に説明され、片や日本語学校の先生方は、学生のほとんどが日本で進学し、そして将来的には日本での就職を考えているという中、自校の学生を紹介・アピールすることに懸命であった。なるべく多くの留学生の皆さんが、その希望に添えるようにしてあげたいという日本語学校の熱気が大いに感じられたのであるが、その真剣な表情の中にも笑顔の絶えない場面も少なくなかった。ある意味で、「笑顔」というのは、何よりも相手に心を通じさせる道具であり、また、人と人とを近づける最短の道ではないか。こうした話し合いこそが、本来であれば、最も良い留学生の面接の教材になるのではないか、そのように考えながら、会場の隅でその様子をうかがった。

毎年開かれている「進学フェア」であるが、今回は、JaLSAに新規加盟した学校や新設の学校の参加が目立った。当然にJaLSAのメンバーであれば、このような機会を大いに利用して、留学生のため、そして日本語学校業界全体のために、活動の場を広げてもらいたいと思う。新たに参加した学校の皆さんは、「参加してよかった」という感想を持っていた。半日足らずで、これだけ多くの大学や専門学校と面接できる機会には他には存在しない。もちろん、1校1校を個別に訪問することはできるし、その方が、長い時間話し合うこともできるかもしれないが、しかし、これだけまとめて話をするような機会はないであろう。留学生の進路のためにあるこのような機会をなるべく多く利用して、留学生の希望をかなえてあげられるようにしてほしいと願うものである。

◆今回盛況であった背景にあるもの

今回特別に盛況に感じたのは、参加校が多かったということもあるが、その真剣さはもちろん、話す内容も盛り沢山なものがあったのではないか。もっとも、今までの催しが真剣でなかったというのではなく、これは取りも直さず、業界全体に留学生・卒業生の進学や就職への危機感があるということに他ならないのではないか。

政府が「留学生 30 万人計画」を打ち出し、昨年それがほぼ達成されたとしているが、ここで、留学生の就職にどのような変化が表れているか見ていくことにしよう。「進学フェア」について述べているのに、就職状況になぜ触れるのかと疑問を感じる向きもあるかもしれないが、実際問題として、大学や専門学校も自校の卒業生が希望通りに就職できないということになれば、それだけ日本語学校からの受け入れ人数が限られてしまうということになりかねないからだ。

まず、外国人労働者、特に留学生の就労事情について考えてみたいと思う。厚生労働省が平成 29 年 10 月に発表した『『外国人雇用状況』の届出状況まとめ』によると、平成 29 年の外国人労働者総数は 127 万 8670 人で、平成 20 年の 48 万 6398 人から毎年増加し、特に平成 26 年以降は急激に伸びている状態にある。内訳は、高度外国人材が約 23.8 万人、技能実習生が約 25.8 万人、永住者などが約 45.9 万人、そして学生のアルバイトが約 29.7 万人となっている。学生のアルバイトが「留学生 30 万人計画」と関連して発表されている数字よりも多いのは、外国人永住者の子供など高校生のアルバイトもこの中に含まれていることによる。

一方、留学生の希望はどうなっているのだろうか。独立行政法人日本学生支援機構の「平成 27 年度私費外国人留学生生活実態調査概要」(複数回答)によると、卒業後の進路として、日本において就職を希望している者が最も多く 63.3%、日本において進学を希望している者または研究者として日本に残りたい者は 50.4%、出身国において就職を希望している者は 20.0%と、大半が日本での進学・就職を希望していることが明らかである。

しかし、平成 28 年に新規に就職できた留学生はわずか 1 万 9435 人で、前年比で 24.1%増ではあるものの、全体の 3 割に過ぎない。こうしたミスマッチの状況は、平成 27 年度に大学(学部・院を含む)を卒業・修了した 2 万 3799 人のうち、日本国内に就職した者が 8367 人と 35%しかいないことでもわかり、専門学校の場合はさらに少ない割合になってしまっているのである。

「留学生 30 万人計画」はほぼ達成したとされているが、出口としての就職口が定まっていない、このような現状では、ただ留学生の数だけの増加をもたらしてしまったということになる。当然に大学や専門学校も、留学生の卒業後の進路、つまり希望が多い日本での就職をいかに支援するか十分に考えなければならない。卒業後の就職の実態がこのような状態であれば、大学や専門学校といえども、日本語学校の卒業生を無条件で受け入れることはできなくなってしまうのではないか。その一方では、労働人口が足りないと言って移民の受け入

れや高度外国人材の受け入れを推進するという動きがあり、それに従った法整備が今後期待されてはいるものの、あくまでも、それは日本の企業側または日本の就労環境によるご都合主義に過ぎず、日本で就業したいという留学生とうまくマッチングできていないのではないか。

日本語学校も、また大学や専門学校においても留学生が増加するということに関して歓迎はしているものの、一方では、企業のニーズや価値観に適合した学生を輩出することができない状態が続いているという現状がある。そのために、各大学や専門学校は自校の就学方針や特長にマッチした学生を受け入れることに懸命になると同時に、日本企業に求められる人材を輩出しなければならないということにもなっているのである。

◆日本の企業が求める外国人卒業生とは

では、「求められる人材」とはどのようなものであろうか。「外国人留学生の採用に関する企業調査」(キャリアスリサーチ 2016年11月現在。複数回答)によると、留学生を採用するとき、企業の81%が基本的には日本人の学生と同じ枠で採用するとしている。外国人であるから特に別な試験にするとか、あるいは、基準を甘くするというようなことはない。これは、大学や専門学校の一部に「別科」があり、外国人を優遇する形で、入学試験が行われている実態とは全く異なる。つまり、それまでは外国人留学生としてある意味で特別扱いされていたにもかかわらず、就職試験になって突然スタートラインが日本人卒業生と同じになるというのが一般的ななのである。

では、そのような試験で企業側は外国人卒業生に何を望んでいるのであろうか。それに対しては「優秀な人材を確保するため」と答えているのが最も多く全体の67%、「語学力が必要な業務を行うため」と答えたのが2番目に多く37%、「外国人としての感性・国際感覚等の強みを発揮してもらうため」と答えたのが36%と続く。つまり、日本人と同じ考察基準でありながら外国人卒業生には、それ以上の能力を求めているという実態が浮かび上がってくるのである。

一方で、受け入れそのものに関してはかなり慎重で、いまだ外国人を採用していない企業の47%が「社内の受け入れ環境が未整備」、30%の企業が「優秀な学生の能力判定が難しい」としているのである。また外国人を就業させた企業であっても、「言葉の壁による意思疎通面でのトラブルがある」とした企業が59%、「受け入れ部署の負担増でかえって効率が悪化した」としているのが47%、「文化・価値観、考え方の違いによるトラブルがあった」と答えたのが46%もあったのである。各企業は、留学生アルバイト、外国人卒業生に対しても第1に「コミュニケーション能力」、第2に「日本語能力」を重視する傾向が強く、次いで「専門知識」や「基礎学力」、そして「協調性」を重視するとしている。

このような現実を肌で感じている大学や専門学校は、当然に日本語学校に対して「日本語能力」だけではなく、「コミュニケーション能力」や「協調性」そして「日本文化の受け入

れ（日本の就労文化や日本的慣習への理解）」の習熟を求めている。一方、日本語学校では、「そうした点を重視したい」としているところも少なくないが、現実には、「日本語能力だけ」を重視して文化や協調性などの習熟にまで手が届かない学校や、実際上はそれをあまり重視しない学校も多く見受けられる。そうしたことが、大学や専門学校を通して、最終的に就職にたどり着かない理由の一つになっている場合が少なくないのである。

今回の「進学フェア」後の懇親会においても、大学・専門学校の皆さんから「非常にレベルが高かった。留学生が日本で学んで良かったと思ってもらえるように、今後もこのような機会を利用したい」といった声が上がった。また、「学生の目は、地方にも向いている」というような指摘もあり、必ずしも大都市ではなく、地方都市においても日本の文化や日本のすばらしさをしっかりと学んで感じられるということを、留学生が重視しているという実態も報告されている。そして、「そのような意見や留学生の実態を多くの日本語学校の先生方と話し合うことができた今回のような貴重な機会があって非常に良かった」という声が多かった。

日本語学校の先生方や大学・専門学校の皆さんが留学生の将来を心配して、このような機会を持ってさまざまな意見交換を行い、その希望をかなえようとしている真剣な姿を間近に見て、改めて JaLSA 加盟校の留学生が今後日本で、そして母国で大いに活躍してくれることを願ってやまない。